

親の養育態度が大学生の評価懸念及び適応感に及ぼす 影響の検討

山本美夏¹・上手由香¹

Effects of parental attitudes on college students' evaluation concerns and adaptation

Mika Yamamoto and Yuka Kamite

Maladjustment may expand to college students at some point. Various preparations were considered for this maladjustment. In a few cases, however, interpersonal relationships do not go well. Personal factors, such as interpersonal fears and social unrest, are behind the fact that some interpersonal relationships cannot be carried out smoothly. Evaluation concerns are a core concept of these psychopathologies. Watson and Friend define evaluation concern as a “apprehension about others' evaluations, distress over their negative evaluations, avoidance of evaluative situations, and the expectation that others would evaluate oneself negatively.” This type of evaluation concern is thought to occur around late childhood. In college students, attitudes such as parental overprotection and severity are suggested to influence their evaluation concerns. However, few studies have focused on evaluation concerns specifically. Thus, how parental attitudes affect college students' evaluation concerns appears to be significant. In this research, we examine how parental attitudes as perceived in childhood influence college students' evaluation concerns and feelings of adaptation.

Key words: fear of evaluation, parental attitudes, adaptation

問題

1. 大学生の不適応

近年、スチューデント・アパシーといった大学生特有の問題に加え、不登校などの大学生の不適応状態が指摘されている(山田, 2006)。不適応に陥る原因として、不本意入学、学部・学科や大学生活への不適応(田中・菅, 2009)、講義についていくことが出来ないといった学力面(谷島, 2005)、友人や教員などとの関係がうまくいかない、そして居場所を見つけることが出来ない(種

¹ 広島大学大学院教育学研究科

口, 2007) といった人間関係などが指摘されている。不適応となる本人の特性として, 白石 (1998) は大学生の幼稚化現象について言及した。同様に, 鈴木 (2012) は心理的に未熟なまま大学へ入学する者の存在を挙げている。彼らには, 青年期の発達課題に関する問題があるとし, 重松 (2005) は大人になりきれない学生の増加を指摘している。山田 (2006) も, 高校までの発達課題が達成されないまま大学に移行し, 適応に大きな困難を抱える学生の増加を指摘している。さらに, 女子学生を中心に, 自己存在の不安, ひとりを恐れる, 他者の巻き込みなどがみられ, ひとりでいることが出来ないために他者依存的になり, その他者に受け入れられなくなると不適応に陥る可能性が指摘されている。

不適応状態に置かれた学生はストレスフルな状況, 抑うつ, 引きこもり, 就職に関する問題などを経験する可能性が考えられる。平成 24 年度の文部科学省の調査によると, 大学生の中途退学者のうち 3490 名 (4.4%), 休学者のうち 2030 名 (3.0%) が, 学校生活不適応を中途退学と休学の理由に挙げている。中途退学や休学の背景に, 学業不振や経済的な理由を挙げる者が多いが, 不適応を理由に退学, 休学する者は上記の通り一定数存在する。学業不振や就職がうまくいかないことを原因にあげる者の根本には不適応の問題を抱える可能性も示唆される。

ベネッセ教育総合研究所 (2012) の「大学生の学習・学生生活実態調査の報告」によると, 大学に友だちのネットワークを持っている学生は大学生生活に満足し, 成長しているという実感を持っている。さらに, 日本学生支援機構 (2011) が行った学生生活調査によると, 大学における学生相談の内容で特に増加がみられるものの 1 つとして「対人関係 (家族, 友人, 知人, 異性関係)」が挙げられている。このように, 学生にとって対人関係の問題は, 大学生生活や精神的健康に関連する重要な問題であることが推察され (廣崎・則定, 2015), 大学生生活への適応は, 大学の中において良好な人間関係のネットワークができるかどうか重要なカギとなっていると考えられる。

2. 対人不安等の特性の定義

対人関係がうまくいかないことに注目すると, その個人の特性として, 対人不安, 対人恐怖, 社交不安, シヤイネスといった傾向が考えられる。以下にこれらの特性の定義について概観する。対人不安は, 「現実の, あるいは現実上の対人場面において, 他者からの評価を受けたり, もしくはそれを予期したりすることから生じる不安」 (Schlenker & Leary, 1982) と定義される。また, 対人恐怖は「対人場面における苦悩・不快・恐怖・不安などの経験」であり「対人場면을意図的に回避する事」や「他者からの否定的な評価を受けることへの恐れ」 (Watson & Friend, 1969) と定義される。さらに, 社交不安 (社会的不安) は「他者からの評価が大きな意味を持つために, 他の多くの不安と異なる特徴を持ち, 目の前に人がいなくても社会的不安が起り, まだ始まっていない対人関係を想像するだけでも生じる不安も含む」 (岡田・渡田, 1992) と定義される。そして, DSM-IV では「過剰な不安や緊張が誘発され, 身体症状を呈し, 対人場면을次第に避ける」が DSM-5 より, IV の定義に加え, 「不安症状をみせることで, 否定的な評価を受けることになる」と改訂されている。次に, シヤイネスは感情的・認知的・行動的側面からなり, 認知的側面は, 否定的な評価懸念・自己非難的思考, 感情的側面は, 例えば主観的な対人不安・動悸・発汗などの生理的反応, 行動的側面は, 社会場面における行動抑制・回避行動であるとされる (岸本, 1999)。

3. 評価懸念とは

このように不安の定義を概観してみると、“他者からの評価”，“否定的な評価を受けることへの恐れ”という言葉が目につく。こうした他者からの評価への恐れを表す概念として、評価懸念がある。評価懸念は、Watson & Friend (1969) が「他者からの否定的な評価に対する心配、および否定的に評価されるのではないかとこの予測に対する心配」と定義している概念である。また、Henchy & Glass (1968) は、他者から注目されているのが気になるのは、他者から自分が評価されているのではないかと心配することを意味し、これを評価懸念と規定している。社交不安との関連を調査した研究では、他者からのネガティブな評価のみならず、他者からのポジティブな評価に対する恐れも見受けられことが指摘されている (猪俣・山下・前田・田中・佐藤・嶋田, 2016)。

評価懸念の生起について、白倉・濱口 (2014) が以下のようにまとめている。一般的な不安や恐怖は、思春期になるにつれて減少するとされるが、社会的状況における不安のみは異なる発達パターンをたどるとし、評価懸念が最初に生起する時期は明確には明らかにされていない (McClure & Pine, 2006)。しかし、Westenberg, Drews, Goedhart, Siebelink, & Treffers (2004) は、児童期後期から思春期にかけて、自己意識の発達や認知能力の発達を背景に他者からの否定的な評価に対する不安が増加すると述べている。さらに、Morris & Ale (2011) は、幼少期の社会的状況における不安の背後には分離不安が見られ、児童期中期以降はその頻度と強度が徐々に減少していき、思春期になると、分離不安に代わり評価に関する懸念が見られるようになるとしている。以上より、評価懸念の生起は小学校高学年頃ではないかと考えられる (白倉・濱口, 2014)。

評価懸念が児童期後期に生起することから、評価懸念に影響を及ぼす要因として、児童期の子どもにとって重要である親の養育態度が考えられる。親の養育態度と評価懸念に関する研究では、拒絶的な養育を受けた子どもは、他者からの評価を気にするとともに望ましい評価に対する期待が低くなり、それが評価懸念に結びつく恐れがあると指摘されている (岡田・渡田, 1993)。また、子ども時代から受けてきた不承認の量が関連していることが示唆されている (Watson & Friend, 1969)。さらに、大学生を対象とした研究では、両親の厳しさ/監督が評価懸念に正の関連を示すことが明らかとなっている。評価に対する不安を中核とする対人不安についても、幼児期の親の期待や賞賛による自己充足が対人不安形成に関連すると述べられている。その他にも、社交恐怖の青年や成人が想起する養育態度として、養護の無さ・過保護などがあるとされている (小川, 1994)。

上述の通り、対人関係の問題は大学生の大学への適応感に関連し、不安は親の養育態度が影響することが示唆されている。また、評価懸念と大学への適応感の関連を調査した研究はみあたらない。以上のことから、本研究では、大学生を対象に、子が児童期に認知していた親の養育態度が大学生の現在の評価懸念を介して大学への適応感に与える影響を検討することを目的とする。

研究 1

目的

児童期に認知していた母親の養育態度が現在の評価懸念を介して大学への適応感に与える影響の検討を行う。

方法

対象者 広島大学の学生を対象に 370 部の質問紙を配布，332 部回収した。小学生のころ最も影響を与えられたという項目で母親と回答した 248 名のうち欠損のあった 10 名を除いた 238 名を分析対象とした（男性 75 名，女性 163 名）。平均年齢は 20.42 歳， $SD=\pm 1.5$ であった。

手続き 無記名の質問紙調査を縁故法にて行った。実施時間は 10-15 分であった。

質問紙の構成 ①認知された親の養育態度尺度（瀧・小川内，2013）：20 項目，「まったくそうでない」から「いつもそうである」の 6 件法。「受容的かかわり」，「統制的かかわり」，「回避的かかわり」の 3 因子から構成される。②大学生用適応感尺度（大久保・青柳，2003）：29 項目，「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の 5 件法。「被信頼感」，「拒絶感の無さ」，「課題」，「居心地」の 4 因子から構成される。③否定的評価懸念尺度（岡田・渡田，1992）：30 項目，「あてはまらない」から「あてはまる」の 4 件法。「否定的評価の懸念・回避」，「評価場面の意識・懸念（否定的評価の予期）」，「肯定的な評価への懸念」，「評価場面の意識と肯定的な評価の期待」の 4 因子から構成される。④フェイスシート：小学生，中学生，高校生，大学生時に友人関係で悩んだ程度について「全く悩まなかった」から「よく悩んだ」の 3 件法，性別，年齢，学年，居住形態を尋ねた。

統計分析 各尺度について確認的因子分析を行った。続いて，各尺度の因子間で相関分析を行った。そして，相関分析をもとに，AMOS を用いて共分散構造分析を行った。

倫理的配慮 回答は任意であり，その結果については統計的に処理をし，個人が特定されないこと，また，調査後は調査用紙およびデータ破棄をすることを質問紙の紙面で説明をした。調査用紙への回答をもって調査協力への同意とみなした。本調査は広島大学教育学研究科倫理審査委員会の許可を得ている。

結果

1. 尺度構成

(1) 親の認知された養育態度尺度

親の認知された養育態度尺度 20 項目について確認的因子分析を行い (Table 1)，瀧・小川内 (2013) と同様の 3 因子を採用した (Table 1)。適合度は， $CFI=.87$ ， $RMSEA=.07$ であり，許容できる適合度が示された。次に，尺度の信頼性を求めたところ，Cronbach の α 係数は「統制的かかわり」で .82，「受容的かかわり」で .85，「回避的かかわり」で .71 となった。回避的かかわり因子の値は高いとはいえないが，一応の信頼性は保証された。そして，各位因子に含まれる項目の得点を合計し，「統制的かかわり」得点，「受容的かかわり」得点，「回避的かかわり」得点とした。

(2) 青年用学校適応感尺度

青年用学校適応感尺度 29 項目について確認的因子分析を行った結果 (Table 2)，大久保・青柳 (2003) と同様の 4 因子を採用した。しかし，項目 15「周りの人と類似している」，項目 20「周りから理解されている」，項目 27「他人から干渉されているように感じる」について，因子負荷量が .40 よりも小さかったため除外した。適合度は， $CFI=.81$ ， $RMSEA=.08$ となった。 CFI 値は低く， $RMSEA$ 値はやや高いものの許容できる適合度であった。次に，尺度の信頼性を求めたところ，Cronbach の

α 係数は「居場所感」で.86, 「被信頼感」で.83, 「課題」で.74, 「拒絶感の無さ」で.80 あった。「居場所感」, 「課題」, 「拒絶感の無さ」に関して α 係数がやや低いが一応の信頼性は保証された。そして、各因子に含まれる項目の得点を合計し、「居場所感」得点, 「被信頼感」得点, 「課題」得点, 「拒絶感の無さ」得点とした。

Table 1
認知された養育態度尺度確認的因子分析

項目	因子			共通性
	Factor1	Factor2	Factor3	
y-13 私の事を何よりも大切にしてくれた	.751			.565
y-19 家で私と楽しく過ごしていた	.746			.305
y-7 私が恐がっている時には安心させてくれた	.742			.550
y-11 私が喜びそうな事をいつも考えて行っていた	.714			.510
y-18 私のことに十分気を配っていた	.650			.423
y-15 自分のことは我慢しても私のためにやってくれることがよくあった	.602			.363
y-1 私の悩み事や心配事を親は理解していた	.563			.317
y-3 私たちと一緒に外出や旅行をするのが好きだった	.522			.272
y-10 親を親の言いつけ通りに従わせた		.837		.701
y-16 できるだけ親の考え通りに私をさせようとした		.760		.578
y-2 私には決まりをたくさん作りそれをやかましく言わなければならぬと思っていた		.724		.524
y-4 私のしたすべての悪いことを何らかの形で罰を与えるべきだと思っていた		.612		.375
y-8 私の行儀をよくするために罰を与えた		.591		.350
y-20 親は私に自分で物事を決めさせたことはなかった		.471		.222
y-6 私がいつも時間通りに帰ってくるようにさせていた		.445		.198
y-14 私が物を欲しがるとダメと言えない方だった			.652	.426
y-12 私の言いなりになる方だった			.645	.416
y-17 私が悪いことをしてもあまりとがめたてなかった			.629	.396
y-19 私が頑張れば私の思い通りになりやすかった			.553	.305
y-5 やってはいけないと言われたことを私がしても黙って見ていた			.389	.151
因子間相関	Factor1	1.000	-.233	.136
	Factor2	-.233	1.000	-.147
	Factor3	.136	-.147	1.000

Table 2
適応感確認的因子分析

項目	因子				共通性
	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	
t-1 周囲に溶け込んでいる	.767				.588
t-22 受け入れられていると感じる	.736				.541
t-6 周りの人と楽しい時間を共有できる	.709				.503
t-16' 孤立している	.694				.482
t-10 自由に話せる雰囲気である	.622				.387
t-25 リラックスできる	.585				.343
t-11 周りに共感できる	.575				.330
t-28 ありのままの自分を出せている	.533				.284
t-7 必要とされていると感じる		.805			.648
t-9 他人から関心を持たれている		.722			.522
t-21 良い評価がされていると感じる		.699			.489
t-2 他人から頼られていると感じる		.662			.438
t-17 一定の役割がある		.576			.332
t-29 存在を認められている		.556			.309
t-12 満足している			.774		.599
t-5 好きなことができる			.612		.375
t-24 自分のペースでいられる			.558		.311
t-19 やるべき目的がある			.509		.260
t-14' 退屈である			.488		.238
t-3 熱中できるものがある			.482		.232
t-26' 寂しさを感じる			.402		.160
t-13' 疎外されていると感じる				.783	.613
t-18' 自分が場違いだと感じる				.691	.478
t-8' 無視されていると感じる				.683	.466
t-23' 浮いている				.654	.428
t-4' その状況で嫌われていると感じる				.545	.297
因子間相関	Factor1	1.000	.839	.746	.741
	Factor2	.839	1.000	.581	.473
	Factor3	.746	.581	1.000	.555
	Factor4	.741	.473	.555	1.000

※ ' が付いている項目は逆転項目である。

(3) 評価懸念尺度

評価懸念尺度 30 項目について確認的因子分析を行い、岡田・渡田 (1992) と同様の 4 因子を採用した (Table 3)。しかし、項目 7「人から評価される時、私はきっとよく評価されるだろうと思っている」、項目 12「自分の服装を人がどう思うか気になることがある」、項目 15「人が私のことを良く評価してくれること期待しすぎることもある」、項目 17「私の本当の力を人に認めてもらわなくてもかまわない」、項目 18「目上の人が私の方を見ていると、評価されているように覆う」、項目 20

「たぶん私は人から有能だと思われている」、項目 26「人はだいたい私にいい印象を持つだろうと思っている」、項目 28「私は目上の人に評価されていると思うと、緊張し、神経過敏になる」については、因子負荷量が.04 よりも小さかったため削除した。適合度は、CFI=.88, RMSEA=.07 となった。次に、尺度の信頼性を求めたところ、Cronbach の α 係数は「否定的評価の懸念・回避」で.91, 「評価場面の意識・懸念 (否定的評価の予期)」で.68, 「肯定的な評価への懸念」で.74, 「評価場面の意識と肯定的な評価の期待」で.75 となった。適合度指標の値がともにあまりよくないが許容できるものとし、項目は削除せず 30 項目を使用することとした。そして、各因子に含まれる項目の得点を合計し、「否定的評価の懸念・回避」得点, 「評価場面の意識・懸念 (否定的評価の予期)」得点, 「肯定的な評価への懸念」得点, 「評価場面の意識と肯定的な評価の期待」得点とした。

Tabele 3
評価懸念尺度確認的因子分析

項目	因子				共通性
	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	
h-22'	.857				.735
h-8'	.788				.621
h-27'	.759				.576
h-1	.755				.571
h-23'	.735				.541
h-5'	.671				.450
h-10'	.670				.449
h-3'	.669				.448
h-14	.584				.341
h-29		.607			.368
h-13		.603			.364
h-9		.594			.352
h-2		.578			.334
h-25		.535			.287
h-30		.512			.262
h-4			.720		.512
h-6			.693		.480
h-16			.689		.475
h-11			.557		.310
h-21				.732	.535
h-19				.680	.462
h-12				.507	.257
因子間相関					
	Factor1	1.000	-.248	.472	.778
	Factor2	-.248	1.000	.152	.000
	Factor3	.472	.152	1.000	.780
	Factor4	.778	.000	.780	1.000

※' が付いている項目は逆転項目である。

続いて、各尺度の因子得点の平均、標準偏差、最小値、最大値を算出した。その結果を Table4~6 に示した。

Table 4
 認知された養育態度尺度の下位因子における要約統計量

	受容的関わり	統制的関わり	回避的関わり
平均値	36.6	22.0	13.3
標準偏差	5.9	6.1	3.7
最小値	9.0	7.0	5.0
最大値	48.0	36.0	26.0

Table 5
 青年用学校適応感尺度の下位因子における要約統計量

	被信頼感	居場所感	拒絶感の無さ	課題
平均値	20.7	37.0	22.2	26.5
標準偏差	3.7	5.5	3.7	4.1
最小値	9.0	16.0	13.0	9.0
最大値	29.0	50.0	30.0	35.0

Table 6
 評価懸念尺度の下位因子における要約統計量

	肯定評価懸念	肯定評価予期	否定評価予期	否定評価懸念・回避
平均値	16.7	17.2	16.2	30.2
標準偏差	3.4	3.1	2.9	5.8
最小値	7.0	8.0	8.0	10.0
最大値	25.0	26.0	24.0	40.0

2. 尺度の因子間の相関

次に、認知された親の養育態度尺度、青年用適応感尺度、評価懸念尺度の下位因子、適応感合計、評価懸念合計の相関分析を行った。その結果を Table 7 に示した。

(1) 認知された親の養育態度尺度と評価懸念尺度の各因子の相関

認知された親の養育態度尺度と評価懸念尺度の相関については、「受容」は「肯定評価の懸念」と弱い負の相関、「否定的評価の懸念・回避」「否定的評価の予期」と弱い正の相関を示した。「回避」は「否定的評価の予期」と弱い正の相関を示した。しかし、どの相関係数も絶対値が.20 よりも低かった。

Table 7
 養育態度, 適応感, 評価懸念の各因子得点の全変数の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1.受容的関わり合計	1.000												
2.統制的関わり合計	-.158 *	1.000											
3.回避的関わり合計	.084	-.144 *	1.000										
4.居場所感合計	.300 **	-.082	-.110 +	1.000									
5.被信頼感合計	.181 **	.002	-.073	.693 **	1.000								
6.課題合計	.306 **	-.093	-.111 +	.594 **	.491 **	1.000							
7.拒無感の無さ合計	.144 *	-.189 **	-.203 **	.554 **	.337 **	.443 **	1.000						
8.適応感合計	.298 **	-.111 +	-.151 *	.911 **	.781 **	.786 **	.713 **	1.000					
9.否定評価懸念・回避合計	.129 *	-.017	.045	-.148 *	-.094	-.159 *	-.087	-.155 *	1.000				
10.否定評価予期合計	.138 *	.072	.141 *	-.121 +	-.090	-.146 *	-.209 **	-.173 **	.601 **	1.000			
11.肯定評価懸念合計	-.157 *	.027	.085	-.211 **	-.227 **	-.195 **	-.212 **	-.260 **	-.167 **	.058	1.000		
12.肯定評価予期合計	.078	.181 **	.144 *	.055	.163 *	-.057	-.145 *	.009	.305 **	.541 **	.021	1.000	
13.評価懸念合計	.086	.078	.141 *	-.175 **	-.106	-.219 **	-.230 **	-.226 **	.792 **	.830 **	.268 **	.659 **	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

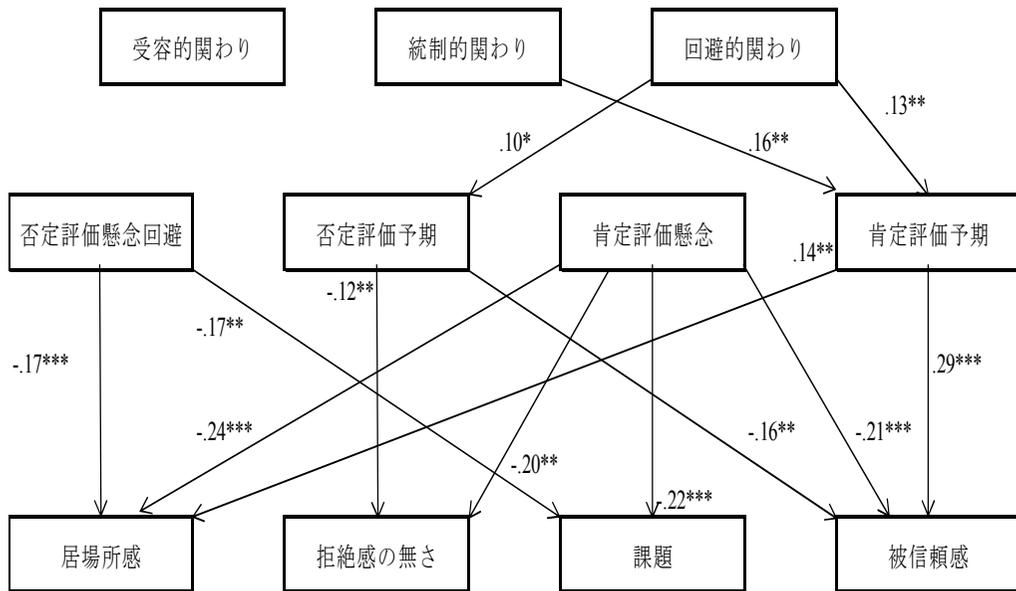
(2) 評価懸念尺度と大学生用適応感尺度の各因子の相関

評価懸念尺度と大学生用適応感尺度の相関については、「否定的評価の予期」は「拒絶感の無さ」、「課題」、「居場所感」と弱い負の相関を、「否定的評価の懸念・回避」は「居場所感」、「課題」と弱い正の相関を、「肯定評価の懸念」は「課題」、「拒絶感の無さ」、「居場所感」、「被信頼感」で弱い負の相関、「肯定評価の予期」は「拒絶感の無さ」・「被信頼感」と弱い負の相関を示した。

3. 共分散構造分析

モデルの構成 大学生の学校適応感に及ぼす親の認知された養育態度と評価懸念の影響を検討するために、親の認知された養育態度の3因子を第一ステップに置き、評価懸念の4因子を第2ステップに置き、学校適応感の4因子を第3ステップに置き、相関行列を参考にモデルを構成した。有意な影響のみられなかったパスを削除し、修正指標を参考に一部の誤差間に共分散を仮定した。モデルの適合度は $GFI = .97$, $AGFI = .91$, $RMSEA = .055$ と許容であった。結果を Figure 1 に示した。

養育態度から評価懸念への影響について、親の統制的な態度が肯定的な評価の予期に対する不安に弱い影響がみられた。また、親の回避的な態度が否定的な評価、肯定的な評価の予期に対する不安に弱い影響がみられた。その他に関しては有意な影響はみられなかった。評価懸念から適応感への影響について、否定的な評価の懸念・回避が居場所・課題に弱い負の影響を示していた。否定的な評価の予期が拒絶の無さ、被信頼感に負の影響を示していた。肯定的な評価懸念が適応感の下位因子全てに弱い負の影響を示した。肯定評価の予期からは居心地と被信頼感に弱い正の影響がみられた。



GFI=.97 AGFI=.91 CFI=.97 RMSEA=.055 N=238

***p<.001, **p<.01, *p<.05

Figure 1. モデル図 (児童期に最も影響を受けた人物として母親を選択)

考察

1. 評価懸念と適応感について

本研究の結果から、「否定的評価の予期」は「拒絶感の無さ」、「課題」、「居場所感」と弱い負の相関を、「否定的評価の懸念・回避」は「居場所感」、「課題」と弱い負の相関が示された。先行研究において、否定的評価懸念が高いことと被害的思い込みの関連が指摘されており (板垣・青木・小川, 2010), 否定的評価懸念が高い大学生は、自身の発言や言動などに対する他者の態度をネガティブ・被害的に受け取ることが考えられる。また、このような大学生は、自身の基準ではなく、他者の基準で自身の行動を評価すると考えられる。そのため、自身が目標や思いを持って行動しても、他人からどう評価されるかが気になり、その結果、自信が低下し、満足感や好きな事ができている感覚である「課題」因子が低下したのではないかと考えられる。また、居心地の良さの感覚についても、自分が満足していても、相手はそうのように思っていないかもしれないと不安を抱くことから、否定的な評価懸念と負の影響がみられたと推察される。

否定的評価の予期からは拒絶の無さの感覚と、被信頼感に負の影響が見られた (Figure 1)。否定的評価の予期の高さは、目上の人などから否定的に評価される不安、人から好意的に思われたいだろうということを目指す。否定的に評価されると感じることで、相手は自分を受け入れてくれないという非受容感を抱き、相手の発言や言動を気にしすぎることになる可能性が考えられる。

また、肯定的評価の懸念からは適応感の全ての下位因子に負の影響がみられた (Figure 1)。肯定

的評価の懸念には、「頼りにならないと思われている方が気が楽だ」、「たとえ私に十分な実力があっても、人から高く評価されると落ち着かない」等の質問項目が含まれる。こうした不安は周囲から秀でることに対する不安であると考えられる。この背景には、自分に対する自信の無さから、他者からの評価を過大評価のように感じられプレッシャーを感じたり、その期待に応え続けなければならないといった信念を持つ可能性が考えられる。さらに、大学生の友人関係において、異質拒否傾向が非異質視不安を高めることが指摘されている(高坂, 2010)。肯定的評価の懸念が適応感に負の影響を示したことは、こうした他者から浮いた存在になることの不安と関連している可能性が考えられる。

2. 養育態度と評価懸念について

本研究の結果、統制的な母親の養育態度が、肯定的な評価の予期に対して弱い影響が見られた。児童期の親子関係で、自分が自由に出来なかったり、親にことあるごとに叱られる経験や、親から監視され、干渉的に関わられることで、他者からの評価が気になるようになり、他者からの肯定的な評価の予期に影響を与えたと推察される。一方、責任回避的な親の養育態度も、肯定的な評価の予期に影響を与えていた。責任回避的であると認知された親は子どもの言いなりになりやすく、威厳があまりない養育をしていた可能性が考えられる。すると、子どもの希望は常に通るような関係性であったと推察されるため、自身の言動や発言はあまり否定されることなく受け入れられていた経験を持っていたと思われる。しかし、成長の過程での失敗体験、例えば褒められると確信していたが、実際はそうでなかったといった経験などにより、肯定的な評価に対する不安や、否定的な評価に対する不安に影響を与えたと考えられる。

研究 2

目的

児童期に認知していた父親の養育態度が現在の評価懸念を介して大学への適応感に与える影響の検討を行う。

方法

対象者 質問紙において最も影響を与えた人物として父親を選択した 65 名中、欠損の無かった 61 名(男性 36 名, 女性 25 名)。平均年齢 20.8 歳。 $SD=\pm 1.7$ であった。

結果

各尺度の記述統計量を Table 8~10 に示した。次に、各尺度の下位因子間の相関分析を行った。結果は Table 11 に示した。認知された親の養育態度尺度の下位因子間の相関については、有意な相関はみられなかった。

Table 8
青年用学校適応感尺度の下位因子における要約統計量

	受容的関わり	統制的関わり	回避的関わり
平均値	34.5	21.1	12.4
標準偏差	5.8	6.7	4.1
最小値	19.0	9.0	5.0
最大値	45.0	36.0	24.0

Table 9
青年用学校適応感尺度の下位因子における要約統計量

	被信頼感	居場所感	拒絶感の無さ	課題
平均値	21.1	37.5	23	26.8
標準偏差	4.0	5.1	4.1	4.5
最小値	10.0	27.0	13.0	17.0
最大値	30.0	48.0	30.0	35.0

Table 10
評価懸念尺度の下位因子における要約統計量

	肯定評価懸念	肯定評価予期	否定評価予期	否定評価懸念・回避
平均値	16.7	17.0	15	29.1
標準偏差	3.8	3.3	3.1	6.0
最小値	10.0	9.0	7.0	16.0
最大値	28.0	25.0	23.0	40.0

Table 11
養育態度、適応感、評価懸念の各因子得点の全変数の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1.受容的関わり合計	1.000												
2.統制的関わり合計	-.037	1.000											
3.回避的関わり合計	.097	-.152	1.000										
4.居場所感合計	.066	-.076	-.070	1.000									
5.被信頼感合計	.096	-.106	-.130	.707 **	1.000								
6.課題合計	.174	-.120	-.208	.648 **	.658 **	1.000							
7.拒無感の無さ合計	-.099	-.373 **	.002	.556 **	.392 **	.373 **	1.000						
8.適応感合計	.075	-.199	-.124	.903 **	.838 **	.822 **	.701 **	1.000					
9.否定評価懸念・回避合計	.078	.252 +	-.112	.149	.075	-.110	.037	.049	1.000				
10.否定評価予期合計	-.107	.324 +	-.183	-.043	-.194	-.208	-.092	-.158	.538 **	1.000			
11.肯定評価懸念合計	-.174	-.026	.001	-.140	-.173	-.014	-.053	-.116	-.267 *	-.051	1.000		
12.肯定評価予期合計	.150	.246 +	-.045	.047	.149	-.132	-.225 +	-.047	.319 *	.261 *	-.128	1.000	
13.評価懸念合計	-.004	.336 **	-.144	.040	-.034	-.187	-.104	-.082	.802 **	.730 **	.168	.573 **	1.000

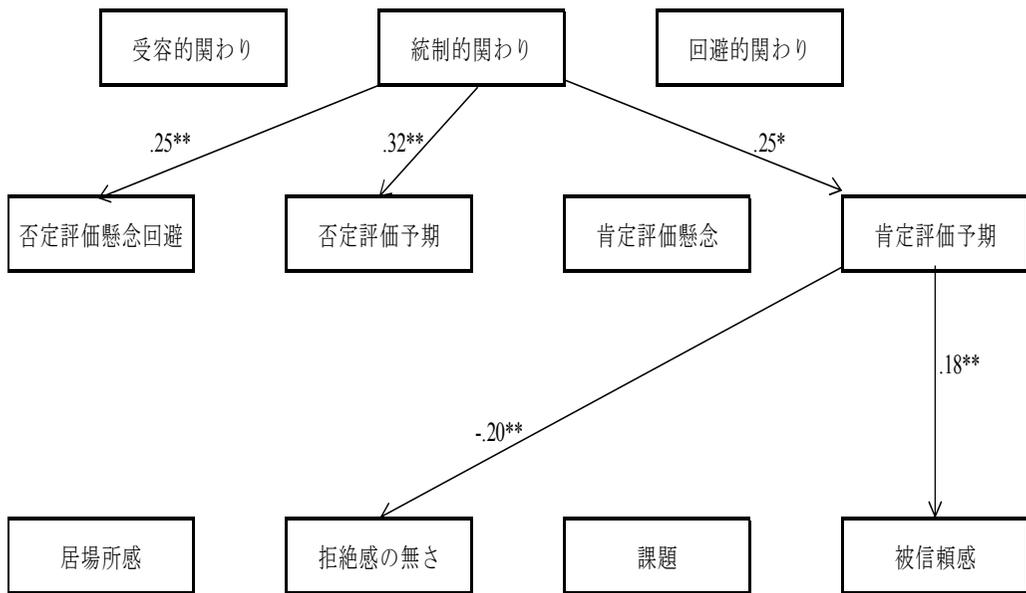
** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

1. 評価懸念尺度の下位因子間の相関

「否定的評価の懸念・回避」は「否定的評価の予期」と中程度の正の相関、「肯定的評価の予期」と弱い相関、「肯定的評価の懸念」と弱い負の相関があった (Table 11)。「否定的評価の予期」は「肯定的評価の予期」と弱い正の相関があった (Table 11)。相関係数は.26 から.54 であった。青年用適応感尺度の下位因子間の相関は以下の通りであった。全ての因子間で有意な相関がみられた。相関係数は.37 から.71 であった。認知された親の養育態度尺度と評価懸念尺度の相関については、「統制」が「否定的評価の懸念・回避」、「否定的評価の予期」、「肯定的評価の予期」と弱い正の相関を示した。評価懸念尺度と大学生用適応感尺度の相関については、「肯定的評価の予期」が「拒絶感の無さ」と弱い正の相関があった。

2. 共分散構造分析

続いて、共分散構造分析を行った。有意な影響のみられなかったパスを削除し、修正指標を参考に一部の誤差間に共分散を仮定した。モデルの適合度は GFI=.92, AGFI=.84, CFI=1.00, RMSEA=.00 と許容できる値であった。結果は Figure 2 に示した。



GFI=.92 AGFI=.84 CFI=1.00 RMSEA=.000 N=61

***p<.001, **p<.01, *p<.05

Figure 2. モデル図 (児童期に最も影響を受けた人物として父親を選択)

養育態度から評価懸念への影響について、親の統制的な態度が肯定的な評価の予期に対する不安、否定的評価懸念・回避、否定的評価の予期に弱い影響がみられた。その他に関しては有意な影響はみられなかった。評価懸念から適応感への影響について、肯定的評価の予期が居心地に弱い負の影響、被信頼感に弱い正の影響を示していた。

考察

評価懸念と適応感について

本研究の結果から、父親の統制的な養育態度が、大学生の肯定的な評価の予期に対する不安、否定的評価懸念、回避、否定的評価の予期に弱い影響が示された (Figure 2)。先述の通り、統制的な養育態度は、子どもが自由に出来ない、親にことあるごとに叱られるような経験を示すものである。このように児童期に父親が子どもに有無を言わせぬ態度で子どもの行動をコントロールしようとするにより、子どもは叱られないように (否定的な評価をされないように) 行動するようになると考えられる。そのため、否定的な評価の懸念や回避、また否定的評価の予期に影響を与えたのではないかと考えられる。さらに、父親の統制的な養育態度が、肯定的評価の予期にも影響していた。このことは、児童期に、父親に監視や干渉的に養育されたことで、他者からの視線も気になるようになり、人からどう見られるかが気になり、また肯定的評価を受けることによる注目などで不安が生じるのではないかと推察される。

また、評価懸念と適応感の関連については、肯定的評価の予期が居場所感到弱い負の影響、被信頼感到弱い正の影響が示された。肯定的予期には「人から評価される時、私はきっとよく評価されるだろうと思う」や「たぶん私は人から有能だと思われている」、「人が私のことを良く評価してくれると期待しすぎることがある」といった項目が含まれる。相手に対し、肯定的に捉えてくれているといったことが反映されていると考えられることから拒絶感の無さや被信頼感を高める結果になったのではないかと考えられる。

総合考察

本研究では、児童期に最も影響を与えた人物として、母親と父親のどちらを選択したかで、母親選択群 (研究 1) と父親選択群 (研究 2) でそれぞれ別に分析を行った。その結果、母親と父親のそれぞれの養育態度が、大学生の評価懸念と適応感に与える影響は異なる可能性が示された。母親では、統制的、責任回避的な養育態度が、父親群では、統制的な態度が評価懸念に影響を及ぼしていた。しかし、これらの影響力は低かった。この原因として、養育態度については、児童期、評価懸念は現在について尋ねたため、児童期の両親の養育態度と現在の評価懸念の間に時間的な隔たりがあったこと、または重要な他の概念があることが考えられる。このことから、養育態度ではない児童期以降の別の概念をとり入れた検討が望まれる。また、対象者に母親・父親それぞれの養育態度について尋ねたものではなかった。そのため、母親と父親の養育態度が評価懸念に及ぼす影響を直接比較することはできなかった。よって、今後の課題として、両親それぞれについての養育態度を尋ねる必要がある。

また、対人不安や社交不安といったものの中核にある否定的評価懸念・回避、予期が母親選択群では適応感に影響することが明らかとなったが、父親選択群では影響はみられなかった。しかし、肯定的な評価懸念に関しては、母親選択群で適応感全ての下位因子に、肯定的予期は、母親選択群・父親選択群で適応感の一部因子に影響を示した。猪俣ら (2016) の研究で述べられたようにネガテ

ィブな評価だけでなくポジティブな評価への懸念に関して詳しく記述，研究していくことが必要となるだろう。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2012). 第2回大学生の学習・学生生活実態調査の報告書
http://berd.benesse.jp/up_images/research/old/daigaku_jittai/2012/dai/pdf/daigaku_dai.pdf
- Henchy, T., & Glass, D. C. (1968). Evaluation apprehension and the social facilitation of dominant and subordinate responses. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10(4), 446.
- 樋口 康彦 (2007). 大学生の適応に影響を与える要因に関する考察—ソーシャルスキル, 交友関係などの観点から— 国際教養学部紀要, 3, 97-102.
- 廣崎 慎平・則定 百合子 (2016). 大学生の過剰適応に関する研究：対人関係と性格特性の観点から和歌山大学教育学部紀要, 66, 9-16.
- 猪俣 菜津美・山下 歩・前田 駿太・田中 佑樹・佐藤 友哉・嶋田 洋徳 (2016). 他者評価懸念の様相による社交不安の程度と差異 日本認知・行動療法学会大会プログラム・抄録集, 41, 244-245.
- 日本学生支援機構 (2011). 平成24年度学生生活調査. <http://www.jasso.go.jp/index.html>
- 上地 安昭・谷井 淳一 (1994). 高校生の適応と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192.
- 川崎 直樹・小玉 正博 (2007). 対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通構造としての自己概念の乖離性及び不安定性の検討 パーソナリティ研究, 15 (2), 149-160.
- 岸本陽一 (1999). シャイネスの3要素理論とサブタイプ (特集 性格心理学再考) 行動科学, 38(1), 81-87.
- McClure, E. B., & Pine, D. S. (2006). Social anxiety and emotion regulation: A model for developmental psychology perspectives on anxiety disorder. In D. Cicchetti, & D. J. Cohen, (Eds.), *Developmental Psychology* (pp.470-502), NJ: John Wiley & Sons.
- 文部科学省 (2012). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 文部科学省.
<http://www.mext.go.jp>
- Morris, T. L., & Ale, C. M. (2011). Social anxiety. In D. Mackay, & E. A. Storch, (Eds.), *Handbook of child and adolescent anxiety disorders* (pp.435-458), New York: Oxford University Press.
- 小川 雅美 (1994). 不安神経症患者と両維の養育態度の関連 東女医大誌, 64 (5), 418-422.
- 大重 啓・渡辺 弥生 (2008). 親の養育態度が子どもの友人関係および学校適応感に及ぼす影響 日本教育心理学会総会発表論文集, 50(0), 333.
- 岡田 守弘・渡田 典子 (1992). 評価懸念および自己制御感から見た児童の学校不適応の測定について 横浜国立大学教育紀要, 32, 151-187.
- 大久保 智生・青柳 肇 (2003). 大学生適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の観点から— パーソナリティ研究, 12(1), 38-39.

- 大久保 智生・青柳 肇 (2005). 大学新入生の適応に関する研究—社会的スキルは後の適応を予測するのか?— 早稲田大学人間科学研究, 18(2), 207-213.
- 龍 祐吉・小川内 哲生 (2013). 大学生の学習的遅延行動に及ぼす認知された親の養育態度と自尊感情の影響 東海学園大学研究紀要, 18, 145-154.
- 桜井 茂男 (1994). 大学生における不適応過程の分析Ⅱ—評価懸念, 学習目標, 原因帰属様式によるモデルの検討— 日本教育心理学会総会発表論文集, 36(0), 319.
- 佐々木 悠・小林 真 (2007). 青年期の対人恐怖心性の規定要因—性別に見た親の養育態度と自己愛傾向による影響— 神戸大学人間発達科学部紀要, 2(1), 179-187.
- Schlenker, B. R. & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization model. *Psychological Bulletin*, 92(3), 641.
- 重松晴美 (2005). 青年期における孤独感および内的対象の想起に関する研究--境界例心性を通して 心理臨床学研究, 22(6), 659-664.
- 白石大介 (1998). 大学生の幼稚化現象—その背景と 課題— 武庫川女子大学学生センター紀要, 8, 9-21.
- 鈴木 裕子・山口 創・根建 金男 (1997). シャイネス尺度の作成とその信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究, 30(3), 49-58.
- 鈴木 遼子 (2012). 大学生の過去における養育態度が現在の自己開示に及ぼす影響 日本教育心理学会総会発表論文集, 54(0), 597.
- 庄司 正実 (2011). 心理学系大学新入生における大学生活への適応感と満足感に関連する要因 目白大学心理学研究, 7, 15-27.
- 高坂 康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向—青年期における変化と友人関係満足度との関連— 教育心理学研究, 58, 338-347.
- 田中 存・菅 千索 (2009). 大学生の適応に関する研究—自己意識と対人関係の視点から— 和歌山大学教育学部紀要, 59, 1-8.
- 臼倉 瞳・濱口 佳和 (2014). 評価懸念研究の動向と今後の展望: その形成プロセスに着目して 筑波大学心理学研究, 48, 49-58.
- 臼倉 瞳・濱口 佳和 (2015). 小学校高学年および中学生における対象別評価懸念と適応との関連 教育心理学研究, 63, 85-101.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinic Psychology*, 33, 481-495.
- Westenberg, P. M., Drewes, M. J., Goedhart, A. W., Siebelink, B. M., & Treffers, P. D. A. (2004). A developmental analysis of self-reported fears in late childhood through mid-adolescence: Social-evaluative fears on the rise? *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 45, 481-495.
- 谷島 弘仁 (2005). 大学生における大学への適応に関する検討 文教大学人間科学部 人間科学研究, 27, 19-27.
- 山田 ゆかり (2006). 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.

山本 真理子・松井 豊・山成 由紀 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30(1), 64-68.

八越 忍・新井 邦二郎 (2007). 母親の養育態度が小学生の社会的スキル, 共感性, 学級適応に及ぼす影響 発達臨床心理学研究, 18, 33-40.